

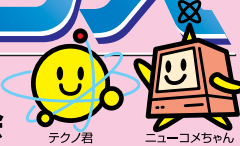
●編集発行 財団法人 郡山地域テクノポリス推進機構

郡山地域ニューメディア・コミュニティ事業推進協議会

〒963-0101 福島県郡山市安積町日出山字北千保19番8 ビッグパレットふくしま3階 ☎(024)947-4400 FAX(024)947-4475

■ホームページのアドレス <http://www.techno-media.net6.or.jp>

■Eメール [テクノ] techno@nm.net6.or.jp [ニューコム] info@nm.net6.or.jp



サザンクロスとは・・・

郡山地域テクノポリスは、あたかも航海の指針となる南十字星(サザンクロス)のように「21世紀に花開く東北の時代」を先導する地域となることをめざします。

Techno Topics

さらなる関係の強化を目指して
「第3回 産・学・官連携フォーラム」
が開催されました

閉塞した経済状態が続く中、学術研究機関が持つ技術的ノウハウ(シーズ)と、産業界が必要とする技術的アドバンス(ニーズ)をマッチングし、これを公的機関が支援して、競争力の高い新技術・新製品の開発に結びつける「産学官の連携」の必要性が、強く叫ばれています。

このような状況の中、郡山地域の産学官の協力体制をより一層強化することを目的として、日本大学工学部、テクノポリス、ニューコムの主催による「第3回 産学官連携フォーラム」が10月8日(火)、日本大学工学部において開催されました。

このフォーラムの第1部では、基調講演として、(財)製造科学技術センター常務理事・フオトンセンター所長の松野建一氏から「これからものづくりと産学官の連携」と題してお話いただきました。

講演の冒頭で松野氏は、「最近、ものづくりに関する特集記事が新聞等に頻りに掲載されるようになってきている。ようやく、日本の得意分野であるものづくりが、「新製造業」という形で見直されつつある。」と切り出され、我が国のものづくりがどうか、産学の協力はどうかあるべきか、について、統計的な数字を示しながらお話をすすめられました。



松野建一氏

先生は、「資源のない日本では、今後も材料エネルギーを輸入し、工業製品を輸出していかねば成り立ちていかないと考えられる。」
「外国製品と価格の面で勝負しても、人件費の安い国にはかなわない。日本が得意とする高品質・短納期を活かして、新しいアイデアに基づいた新しい製品を短期間で商品化し、しかも適正な利益を含んだ価格で販売しなければならぬ。」と力説され、「この厳しい条件をクリアし、新しいアイデアを生み出すためには、企業の努力は欠かせない。」と続けられた。また、「今後、経済構造の変化により、ナノテクノロジー・バイオテクノロジー・環境分野・情報分野等が有望な分野として挙げられているが、これらを製品にするためには、ものづくり技術はかせない。先端的なものづくり技術を実現するためにも、産学官の連携は不可欠なものとなっている。」とお話されました。

第2部では、「産学官発表会」と題して、大学側・企業側から事例の発表がありました。大学側からは、4名の発表者から、現在日本大学工学部が取り組んでいる研究プロジェクトや福島県知事のクラスターへの取り組み、日本大学工学部国際産業技術・ビジネス育成センター(NUBIC)についての説明が行われました。



企業からの発表を行うマイルドホーム 木原慎氏

企業側からは、日大工学部をはじめとする研究機関からの技術的支援を受けて製品化に成功した4社(マイルドホーム(株)、アース工房、東北プラントサービス(株)、東白農産企業組合)から製品の紹介と製品化までのプロセスで苦労したことが発表され、続いて、シンタック機能の強化など、今後の日大工学部へ期待することについて2研究会(ビオトップ研究会、ユニバーサルデザイン研究会)から意見が述べられました。

第3部のポスターセッション・交流会会場では、日本大学工学部の先生方や各種支援機関、第2部で発表した各社がそれぞれの成果等について掲示し自分の研究テーマや成果等についてパネルにして展示し、参加者へ熱心に説明していました。

また、この第3部と並行して、日大工学部の施設見学会も行われ、希望された方々が次世代工学技術センター等を見学し、担当の先生から詳しい説明を受けていました。

COMDEX KOREA 2002

視察ミッション派遣
～韓国でのIT戦略を学びました～

テクノニューコムでは、8月27日～29日、2泊3日の日程でソウルで開催された韓国最大のコンピュータ展示会「コムデックスコリア2002」を視察し、国家戦略である情報通信政策とブロードバンドのインフラ整備を背景に、IT産業の進展著しい韓国の最新技術やIT戦略を学びました。

郡山地域のIT産業の活性化や韓国企業とのビジネスマッチングの促進などを目的としたこの視察ミッションには、郡山地域のITベンチャー企業やIT関連企業から18名が参加しました。

韓国をはじめ世界有数の企業約200社が出展した会場では、ネットワークやソフトなどの新技術、製品等を視察し、展示場内のコネクス(日本の幕張メッセのような所)



参加者からは、「今後の企業での研究開発について参考としたので、これからのような催しには積極的に参加していきたい。」との言葉も聞かれたように、産学官連携の重要性について改めて確認されたようでした。



ポスターセッション



一階のホールでは、韓国版のインターネットカフェ(PC房(ほん))も体験しました。(マクドナルドの一角にも無料のインターネット利用スペースがありました。また、ジェットロソウルセンター所長から韓国経済についての説明を受けたほか、韓国ITベンチャーとの交流会も開き、今後の技術提携やビジョン等について情報交換を行いました。

今回の視察ミッションを契機に、韓国とのITビジネスの進展に期待するとともに、今後も韓国とのIT分野での産学交流の促進に取り組んで参りたいと思います。

「IT産業リトレーニング推進事業(前期)閉講

テクノ・ニューコメでは、福島県からの委託を受け、ITソフト分野を対象に、実際に市場で生き抜けるナレッジワーカー(知識技能者)の養成を進める「IT産業リトレーニング」推進事業(前期)として、IT産業リトレーニング推進事業(前期)と「ネットワーク管理者養成コース(全80時間)」を7月から9月にかけて、日本大学工学部と連携して実施しました。「システム管理者」には、離職者やSOHOの方14名が、「ネットワーク管理者」には、21名が受講し、シニアの知識やネットワーク構築など専門的な学習を行いました。日本大学工学部の講師陣が指導にあたり、受講者からはスキルアップが図られたと評価を得ています。今後「ITコーディネーター」の紹介や相談会を設け、受講者に対するフォローアップやネットワークづくりを進めてまいります。なお、今回同様の研修コースを平成15年1月から後期分として開催予定です。別途参加者募集を行いますので、ぜひ受講ください。

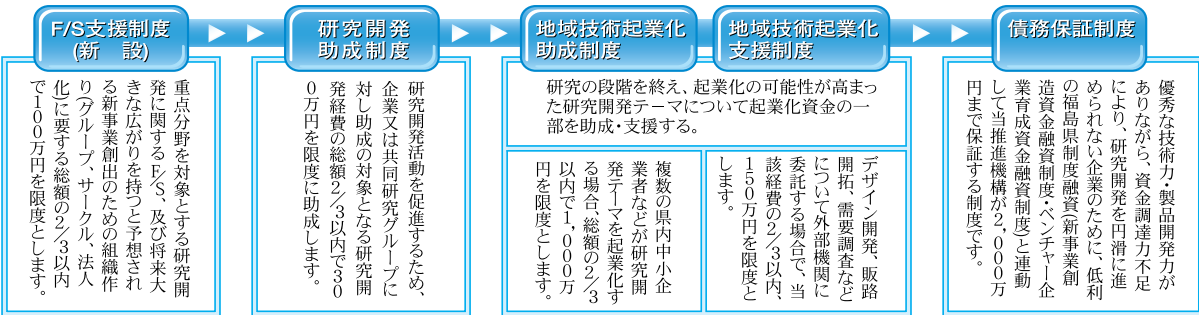


「F/S支援制度」新設!!

研究開発助成等の成功率を上げるためには、開発に着手する前段のフィージビリティスタディ(実現可能性調査・企業化調査=F/S)を十分に行う必要があります。これがないために、当初ねらいどおりの成果が得られなかったという事例が多く見受けられます。(財)郡山地域テクノポリス推進機構では、この考え方にたち、新たに「F/S支援制度」を設け、よって「研究開発助成」等の成功率を上げていくこととしました。どうぞご利用ください。

F/S支援制度は常時受付けます。他の4制度については、2回/年(前、後期)の受け付けとなっています。詳しくは、事務局におたずねください。

14年度後期の申請は11月末日までとなっています。



今回は技術者交流プログラムのたばさー日本大学工学部教授の坂野進さん(株)の村田正晴さんに登場していただきます。

「若者・学生に生甲斐と目標を持たせよう」

日本大学工学部 教授 坂野 進



先日、クローチアのザグレブで国際会議があり、イタリア(ミラノ)、スイス(ジュネーブ)、クローチア(ザグレブ)と回って来ました。国際会議の出席の他に、2、3の大学へ行き学生の勉学の状況を観察して来ました。ヨーロッパ全体でもほぼそうですが、学生が学生らしく地味な服装で、図書館などを活用してよく勉強しています。それに比べて我が国のあるいは私の勤務している大学の、あるいは見てみると、ほとんどの学生は勉強する、努力すると言っているが頭の中から消えてしまっています。茶髪、耳輪、鼻輪、派手な服装、汚い服装、種々雑多な学生が、レゾランド化した大学に来て、何となく一日を過ごして、日本の大学生の勉強時間は一日3時間である。最近、調査報告されている。大学での授業時間を含めてである。戦後、余りにもアメリカナイズされたなどいろいろの原因はあるが、若者が勉強や努力

力をしていない最大の理由は目標や生甲斐を持たないことであろう。スケートボードを持ってきた、一日中練習している。興味のあるものには集中してやるのに、勉強や技術の習得となるとさっぱりである。「努力できるのも能力の内」と言われているが、努力という言葉が死語になりつつある。さて、若者・学生に生甲斐や目標を持たせるにはどのようなことでもよいから目標を達成した時の充実感を体験させよう。これは難しいことである。例えば、グループを結成させ、ロボットコンテストに出場出来るように努力させた。卒業研究のテーマを自分で考えさせ、自立的に計画し、結果を出させる。などの指導をしていく。この時、目標の管理として、この時期が言われ、是非がいろいろ議論されたことがあった。現在の我が国においては、若者は野放しの状態にある。企業に就職

「企業内ベンチャーとして 郡山から全国へ発信」

東北アンリツ株式会社 第二技術部担当部長 村田 正晴



当社は、1986年に地元の若い力を結集し操業を開始。事業としてデジタル公衆電話機、カード社会に向けての多種多様なカードターミナル、光通信ネットワーク用計測器および携帯電話関連の移動通信用測定器など、社会インフラのための製品群を主に生産しています。1991年には地元技術者の採用で開発部門を創設。そして本社プロジェクトに参画し、アナログ・高周波、LSI設計・高速デジタルメカトロソフトウエアなどの技術蓄積に努めてきました。

私は当地に赴任し4年目を迎え、この間これら技術蓄積のもとに、近郊の産官の方向に新企画のビジネス性についてお話を伺い、開発プロジェクトを立ち上げてきました。その製品の一つには、地元ベンチャーの協力による福祉機器電話録音機を創り、ネット販売の試みもしてみました。そして効果の情報発信の大切さを知りました。この日は社内ニーズを生産新ツール目で見える管理板を開発メンバーの2年間の努力が実り、現在ようやく本格的発売に漕ぎ着

職員の異動

7月1日付異動 技術振興コーディネーター 神原 稔

この7月1日より、技術振興コーディネーターとして着任いたしました神原でございます。テクノポリスとしては、初めての技術職配置としまして、その基礎づくりに努力し、多岐にわたる業務にどうぞよろしくお願い申し上げます。



技術振興コーディネーター 神原 稔

して初めて管理された社会を経験する。管理を嫌って、フリーターが増加している。フリーターと響きはよいが、一種の失業者である。将来に対する目標を持たない若者の群れである。家で両親が教育し、管理するのが本来である。学校、企業、社会に期待している。「家庭の充実」ということが非常に重要ではないだろうか。若者の力による郡山の活性化、郡山が全国のモデル地域となるような運動はないだろうか。皆さんのご意見をいただきたい。(E-mail:skano@med.ch.nihon-u.ac.jp)

けました。この製品はリライタブル用紙の採用で表示表示に利用できる電子黒板型のネットワークプリンターであり、生産現場以外にも、自治体ロビー、体育館の掲示、学校の掲示にお使いいただける製品となりました。我々は製品コンセプトをシンプル、ユニーク、ユーザフレンドリー、郡山からキラリと光るオリジナル製品を創り、郡山から全国へ発信し、Infolandが高まることを期待しています。自然に恵まれた実り豊かなこの地で、ITを大いに活用し、中央と変わらぬ環境で開発を行い、そして景気後退の今の時期だからこそ、テクノポリス主催地域産官交流の機会に感謝し、活かし、今後も二気のある企業内ベンチャーへと推進していきます。

ノーベル物理学賞に東大名譽教授の小柴昌俊さんが選ばれた。「東大をピリで卒業した劣等生」とは本人の弁だが、ピリであったが東大出は優秀と思っていたところに、次の日、化学賞の田中耕一さん受賞のニュース。43歳という若さもさることながら、民間企業からの受賞、「私は博士でなくエンジニアである」との発言など、企業で開発にたずさわる方々には力強いエールとなったのではないだろうか。高度な技術、最先端の技術開発を目指す産業界に追い風になればと願いたい。さて、景気の方は連日の株最安値更新の報道に、気分も沈みがちですが、コトコトと地道に努力を重ねて、栄えある賞に輝いたお二人のように、ねばり強く明日に向かっていきたいものです。

